

北海道の麦生産者にとって昨年2015年は最高の年だった。普段は10俵なのに15俵あったなんて話がさらに聞こえてきた。そのような生産者の利益はざっくり平年の5倍の銭がポケットに入ることになる。

なぜか？ 理由は簡単。日本では冷夏の影響が出やすいといわれるエルニーニョが発生したからだ。過去1983年、93年、2003年もやはり麦は大豊作であった。

昨年のように春から高温があり、麦の開花期以降に気温が下がると登熟期が長くなるので、結果として収量が上がる。過去の冷夏ときはそのまま気温が低かったので大豆や稲の収量は上がらなかったが、昨年は8月に入り平均気温が持ち直したので多くの作物が豊作となった。ただ、タマネギは大豊作で価格が大暴落、大赤字の生産者がほとんどだったが、それを安く購入して販売できた団体はホクホク顔らしい。

地球規模気象変化と地球温暖化

私も皆さんと同じで自分が住む地域のことで以外はまったく興味がない。まして昨年は世界の平均気温が過去最高だったといわれてもアホらしいくらいピンとこない。とはいっても世界を見渡すと北海道が冷夏の

ときには米国中西部から東部にかけて同じ気象状況であったりするのだから、神の思し召しは北極の寒気にいるるといたずらをするようだ。地球温暖化を心配する人が多いが、北海道が100年後に平均気温が2℃上がるという事は、いまの秋田や岩手と同じになるだけで正直「だから？」と理解したらいことだけの話だ。

地球温暖化の原因は本場に二酸化炭素の増大？ 太陽の黒点？

まさかオーストラリアの牛のゲップやメタンガスが原因か？ などとNHK・BSの世界ワールドニュースではオバマ大統領が何か話しているのを見ていると、子どもたちがこう言った。

「原音ではグローバル・クライメット・チェンジ（地球規模気象変化）って言ったのに日本語では地球温暖化って言うてるよ」

NHKは子どもにもわかるような大嘘を平気でかましてるのか？ というより変な危機感を植え付けて、その原因は大企業や京都議定書

Vol.94 自走式スプレーヤーと小作人根性



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

にサインしなかった米国の責任だ！とも思わせたいのだろう。

ただ、おかしいことがまったくないわけではない。

6月の気温は高めであったが、過去2年間ほぼ同じ日に数時間で100mm近い降雨になったのは単なる偶然なのか。麦の収穫後に播種・栽培するソバでは、9月27日の雹まじり30分間の集中豪雨を初めて経験した。

この5年ほどは冬期間で

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

も十勝沖に低気圧が発生することが多くなり、その影響で普段積雪がない地域に降雪があったり、オホーツクのようにもともと積雪がある地域は猛烈な暴風雪に遭うことになる。

いまの時点（1月下旬）の長沼は半年の半分以下の積雪だが、シーズンが終わりにはいつも、つじつまが合うようになるのでこれからの積雪が気になるところだ。

その日本の冬に関連するマジか？と思う話をラジオで聞いた。何でもフィンランドの北に位置するバレンツ海の水が減る（暖かくなる）と日本は寒くなるようだ。北海道においては寒いことと雪が多いことは別な話で、このコラムが読まれるころには冬の結果が出ているだろう。

農薬散布がパーになつてしまふ危機

さて、昨年の農業の話に戻そう。農薬の散布にはスプレーヤーを使うが、自走式とトラクターけん引式の2通りがある。どちらも金額にすると3000万円相当である。資金に余裕があれば自走のスプレーヤーを購入するのは当然の選択だ。

だが、現実にはみんな余裕があるはずもなく、やっぱりトラクターけん引式のほうがコストを抑えられるかなうなんて考えたりする。

結論をいうと、やはり自走式スプレーヤーを購入した生産者のほうが、将来成長することは間違いない。難しい話ではなく、選択を間違えたと二兎を追う者は一兎をも得ずとなる。2つが同時にうまくいくのはバセクシヤルの方たちってことだ。

実際、年間の1機械当たりの作業時間で見るとけん引式のほうが明らかに長い。そうなるとう自走式スプレーヤーの利用価値が上がるが、管理の仕方も大切になってくる。

自走のジョンディア4630スプレーヤーは、作業終了後車内のリモコンを操作して建物横に作られたシヤワー装置に通過させ、車体を洗うのがルーティンになっている。その後、燃料である軽油を入れるのだが、いままでも数回ほど燃料キャップを閉め忘れたことがある。

同系色の燃料タンクとキャップは工業デザイン的によくはない。いまは視覚で気がつくように自分で黄色に着色してイヤでも目立つようになっているが。

閉め忘れたときは、もしかしたら燃料タンクに水が入っているかもしれないと思ひ、JAながぬまのスタンドから軽油用水抜き剤（イソプロピルアルコール）を1本入れた。

これでバッチリだと思っていたら、その後エンジンの回転数が上が

ったり下がったりして調子が悪くなった。燃料タンク、パイプを掃除したがまったくお手上げ状態。

このような場合はヤンマーさんにお願ひする。米国並行物なので対応してくれるか心配だったが、日ごろのお付き合いとアイスクリームの差し入れが効いたのか快く整備していただけることになった。事前に燃料トランスファア、ポンプ、圧力センサーなどを米国から部品として購入しておいたが、残念ながら70万円かけても直らなかつた。最後の手段で噴射ポンプをバラす話も出たが、そうなるとう今シーズンの作業はパーになり農薬散布はできなくなる。

軽油用水抜き剤の知られざる真実

そこでこのスプレーヤーを買った米国の販売店とやりとりした。数を扱っているのだから何か方法があると思つたからだ。旧知のメカニックであるダン・ルッテンがパーツ番号TY2698、フーエル・プロテクターをクリーニングモードの割合で軽油と混ぜてタンク2回分使ってくれと指示を受けた。

ただ、このフーエル・プロテクターは液体で、航空便で送るには専用の容器等のコストがかかり、現実的ではない。まさかと思いつつヤンマ

ーにこの商品があるか聞いてみた。「在庫ありますよ」となり、すぐに燃料タンクに投入して様子を見た。何とエンジンが以前のように快適に戻つたではないか。

まさしく魔法の薬である。近所の20年落ちのUDトラックにも入れたところ、黒煙が見事に消えたということだから、もしかしたらジャパネットたかたで販売されるくらいに優れたものだろう。

では原因は何だったのか？最新のコモンレール式エンジンには専用の軽油用水抜き剤を使用しなければならぬのだ。私が使つた水抜き剤も裏に書いてあつたが、手で隠れて見えなかつたし、気がついたときには遅かつたのだ。

このことを整備関係者はみんな知つていた。そこで麦刈り時に入入りするトレーラーの運転手さんに聞いてみたが、知つているのは半分程度だつた。

後からJAながぬまにはエンジンの種類を確認してから販売するようメールを送つた。普段は返信もしないのに珍しくすぐサンキューメール？が来た。

70万円の出費は痛かつたが、私が損してザマー見ろと思う生産者は一生、自走式スプレーヤーを購入できない小作人根性の持ち主である。